JAPAN TODAY

2021年 MONTHLY 4,5,6月号

ジャパン・ツディ編集局 村井 実・編集長 〒160-0004 東京都新宿区四谷4の6の1 四谷サンハイツ1205号

新聞は時代を映す鏡である！（ジャパン・ツディは全国47都道府県庁、地方自治体に配布しています）

財務局職員、公文書改ざんに追い込まれ自殺

週刊文春の連続追及はジャーナリズム魂

週刊文春（平成30年3月11日号）は次のように書き出している。3月7日、近畿財務局職員だった赤木俊夫さんが公文書改ざんの強制を苦にして自殺した。

その妻だった雅子さんが絶望の日記を初めて公開した。

主要な部分を文春から引用しよう。

「森友学園に格安で売った国有地の取引きをめぐり、財務省は公文書を不正に書き換えた。安倍首相（当時）が『取引きに私や妻が関係していたら、総理大臣も国会議員もやめる』と国会で大見得を切ったが、文書に妻・安倍昭恵さんの名前が何カ所もあったから、すべて書き換えて消した」。

「その不正行為を現場でやらされたのが赤木俊夫さんだ。改ざんに反対したのに、職場に見放され自分一人のせいにされる、と苦しみ抜いて自ら命を絶った」

「財務省・佐川宣寿理財局長（改ざん当時）が改ざんを指示した、と俊夫さんの遺書に残されている」。

右の通り、佐川は安倍首相の意向を「忖度」した。

北朝鮮の金正恩総書記の兄殺害と似ている赤木さんの自殺

週刊文春のジャーナリスト魂のすごいところは、赤木さんの自殺を死後も追っていることである。

大手新聞、NHKテレビ、民放テレビなどは一過性の問題で処理して、その続きがない。マスコミとは何となさけないことか！

週刊文春が追いかけている「真実」に対して、政府・安倍、そして安倍官邸グループは文春を告発することもしない。「どんなに騒がれても、時がたてば忘れられる」とタカをくくっているのが読みとれる。

一国の総理大臣が戦前の桂内閣の記録を破る首相在任新記録を作ったとしても、財務省職員を自殺に追いやった事実は、政党史に残る大きな汚点である。

このやり方は、かつて北朝鮮の金正恩総書記が腹ちがいの実兄をクアラルンプールの飛行場で密使を使って殺害した手口にそっくり。

それが日本マスコミは通り一遍のモリ・トモ事件として赤木俊夫さん自殺で片付けるにしては、日本のマスコミは泣く。

今からでも遅くはない。日本のマスコミは文春のように安倍追及の手を止めてはならない。文春がんばれ！

赤木さん自死（自殺）は新しいニュースではないが、マスコミが執ように追いかけるのがマスコミの使命でもある。

赤木さん自死の前、赤木さん宅の上空で自衛隊のヘリ機が舞っていた、と民放テレビで放映していたが、これは赤木さん威嚇だったのではないか、と疑ってしまう。

一番重要なことが最後になったが、モリ・トモ問題、桜を見る会など政府・官邸が出した文章の多くは戦前のような黒塗り文字が圧倒的に多く、国民の目を誤魔化す作文ばかりが目についた。

それは財務省の佐川宣寿が安倍首相に忖度して近畿財務局を動かしたことは、赤木遺書で明白になっている。

そうした事実を知りながら、安倍は赤木さんの墓に線香の1本もあげずに逃げきった。これは人間ではない。首相ではない。

今、これを切（斬）りこむジャーナリスト隊長もいない、ということは日本国はなさけない。

番外編「新聞不信」（週刊文春、R3・3・11）

「菅義偉首相の長男が勤務する東北新社から総務省幹部が接待を受けていた問題で、同省が11人を処分した。

各紙は25日付朝刊で紙面を大きく割いたが、一連の疑惑が浮上して、かなり時間がたっているのに、同じことを書いている。

毎日は『菅首相揺らぐ足元』政権運営が厳しくなったというおなじみの話。

朝日は『接待の目的や広がり、行政への影響など、はっきりしない点がまだ多い』と情報番組のコメンテーターが言いそうな記事を載せた。その隠された事実を明らかにするのが新聞の使命だろう（中略）

読売は衛星放送で使われる周波数に限りあり、総務省は割り当て再編と新規参入を進めていたこと、衛星運用会社に支払う利用料金の引き下げ問題が接待の背景にあるのでないかと書くだけで、先の政策の見通しを書いていない。（中略）

日経は総務省幹部の処分を報じた25日付け朝刊まで4回にわたって『携帯値下げ攻防戦』という連載を載せた。書いてあるのは通信事業者の話ばかりで、不祥事の永田町や霞が関への影響は見事に避けている。取材不足か、政権への忖度か。」

× × ×

右の一連の総務省問題は、もし「文春」があばかなかったら何事もなく「記憶にございません」、「知りません」――で済まされた。これでは世間では新聞もテレビもいらない。文春だけ読んでいればよい（笑）笑えない日本マスコミの現実である。（実）

村井 実（むらい・みのる）

北海道日高村（現・日高町）番外地生まれ。昭和43年、早大卒。毎日新聞記者を経て昭和48年、時事通信記者。警視庁記者クラブを経て国会記者。田中角栄から自民党歴代首相を取材。その間、ロッキード事件、田中金脈事件、リクルート事件を担当。宮内庁記者。昭和63年米国スタンフォード大学フーバー研究所入所。米国大統領のフォード、カーター、ブッシュ、さらにケネディー一族や英国のエリザベス女王、サッチャー首相などインタビュー、単独会見。早大など3大学で教鞭をとる。「ジャパン・ツディ」編集長。

リエール冠番組がスタート！

『リエールの未来へ TO GO！』

To Go…は、「お持ち帰り」の意。
明日へ、未来へ、皆様を元気に、役立つ情報を毎回違うテーマでお届けする番組。
毎週 月曜日 17：00～17：50 / 土曜日 15：00～15：50

●鳥越アズーリ FM 88.8 MHz https://azzurri-fm.com/（動画配信型FMインターネットラジオ番組）
パソコンやスマホから『鳥越アズーリ FM』または番組名で検索
全国！世界から！何処でも、誰でも、手軽に無料でご視聴頂ける番組です。
生放送日から2週間後より、YouTube に放送分全番組がアーカイブ保存され、皆様に無期限で、無料で、繰り返しご視聴頂けます。

●番組スポンサー募集
月5万円～リエールの番組をご活用下さい。

←ここから生放送をご視聴頂けます。

←アーカイブ再視聴一覧 https://azzurri-fm.com/program/index.php?program_id=260

↓リエール公式サイト https://rieir.jp

お仕事のご依頼・各商品のお問合せは
info@rieir.jp
0120-047-870
オシナ ハナマル

MC：柴田リエール

ウソから出たマコトを演出して逃げた安倍首相

安倍晋三首相が7年8カ月という日本の憲政史上、最長の首相を務め、令和3年9月、首相の座を下りた。

モリ・トモ問題、桜を見る会、黒川検事総長昇格未遂問題…これらのどれをとっても無様（ぶざま）な安倍を象徴した「ウソから出たマコト」を演出して去った。

これは明らかに私は「安倍の政策の行き詰まりを病気に見せかけて逃げた」とみている。国民はそうした事実に気付いていない。

話は古くなるが、私が現役の国会記者時代、当時27歳の中村喜四郎が自民の新人代議士として、国会議事堂に初登庁の朝、彼をとらえてインタビューした記憶がある。前途洋々だった。

しかし、中村代議士は、途中、ゼネコン汚職事件で有罪となり失職。平成17年に国政復帰。今、中村代議士は当選14回、立憲民主党の衆院議員として活躍している。

その中村代議士は令和2年10月2日の日刊「ゲンダイ」のインタビューに「50議席差まで詰めれば与党逆転可能」として次のように答えている。

「安倍さんは体調を崩し、投げ出す流れになっていくのをみんなよーく見ていた。次は菅さんと二階さんで決めるだろうという中で、菅さんが手を上げ、雪崩を打ったように後継が固まった。

読み筋通りだったが、問題は1日でトップが決まるような国が民主主義国家と言えるのか」

「野党がコロナ対応の国会審議を求めても3カ月も開かない。コロナ禍と言いながら、解散総選挙をチラつかせる。矛盾しています。

強権的な国になり、独裁国家に突き進む可能性がある」（以下略）

この時、私は過去の自民党史をふり返って、小渕恵三首相が急に倒れて病床に伏している間、森喜朗を次の首相に立てようと、当時の自民の有力な議員、野中広務ら5人の密会で森首相を決めた。国民からブーイングが飛んだ。

今回の安倍から菅首相の誕生は、森首相誕生のいきさつと、そっくりさんではないか。ここでも国民から強いブーイング。悪の「非民主主義」永田町の歴史は繰り返している。

× × ×

安倍首相の成績表を総括すると、長期政権の割には内容なく平均点以下の首相だった。私の周囲の人間は、安倍演説はカンナクズのような価値のないものばかりだったと言う。首相になった立場で委員会でヤジをとばす首相は安倍以前で見たことはない。ヤジの回数では百回以上だ、と聞いている。

私は憲法改正は「安倍では絶対に出来ない」と再々、各紙に申しあげてきたが、その通りとなった。なぜかというと、「ウソ八百」を言いふらして憲法を改正しようとしても、国会発議は国会議員の3分の2を必要とする。

今の自民党議員は楽に3分の2を得られようが、その先は「国民の半数」の賛成票を得られないと、憲法改正は認められない。従って安倍のイカサマ政治では国民の賛同は得られない、というもの。

こうした意見は私のみならず、大学教授らの中には「安倍の手で憲法改正は出来ないから安心している」と言っていた。それは国民の信用がなければ憲法改正できない（2分の1の賛成）ことを見越している。

しかし、私は憲法9条に関しては、時間をかけて国民を説得する必要性がある時代にきている、と思っている。

その点では安倍の公約である憲法改正は、人気とりの材料にしただけに終わった。

経済では東京五輪や大阪万博であおったが、日銀を私物化して黒川総裁にしたものの、日本の経済回復につながらなかった。

安倍時代が進むにつれ、IT産業、未来企業に遅れをとって、米中はじめ韓国、台湾にまで追い込まれたのは、国際経済落ち目の日本の恥を知れ、と安倍に申し上げたい。（ハーバード大、スタンフォード大の経済学者、政治学者の声）

この結果、日本社会は小数の金持ち階級と大多数の貧困社会に分断されつつある。

また、安倍は過去の衆院参院で各3回、計6回ぐらいの国政選挙をやっているが、選挙後の国会開会を大幅に先のばしにしたり、国政に問題が発生すると、すぐ解散（衆院）に打って出てしまうという姑息（こそく）な手段で逃げてきた。

それでは何のため国会があるのか。私は野党も学会会並で評価していないが、安倍内閣は国民に討論の場を見せなかったのが多々あり、自民300議席（衆院）の1党独裁の横暴を見せつけた怒りは消えない。

そして、この本文でも中村喜四郎氏が指摘しているように、「コロナ禍で大騒ぎ」されそうな時期に3カ月も国会審議をしなかった安倍の罪は重い。

これを指摘しないで安倍隠しのコロナ禍ばかり指摘するのはスジ違い。安倍は政策が行き詰まり政権放棄した、と私はみている。コロナ禍まき散らしの初犯は安倍政権にある。

しかも安倍から菅首相にバトンタッチされたが、安倍と菅はコインの裏表の関係にあり、安倍のゴマカシ政治は菅もそっくりまねており、菅政権もやがて苦境に陥るとみる。

× × ×

次に歴史上、私が一番重要視してペンを執っているのは何かというと、安倍政権の時、「モリ・トモ問題」にしても「桜を見る会」にしても、官邸を軸にして政府要人や関係役人が協力してマル秘書類を改ざんしたり、文字を黒塗りにして真実を打ち消した。

このほとんどは安倍の意向を受けたり、安倍に忖度してやらかしたものであると、と国民は知り尽くしている。

70年以上も前の日本敗戦について月刊文芸春秋の編集長だった歴史家、半藤一利氏は「歴史と戦争」（幻冬社新書）の中で次のように書いている。

「陸軍省と参謀本部などがあった市ヶ谷台の庭では、終戦前日の8月14日の晩から15、16、17日まで延々と火が燃えていたそうです。陸軍が資料を燃やしていたんですね。ただ陸軍の悪口ばかりも言えない。新聞社もみんな日比谷公園に集まって、資料から写真まで燃やした」。

半藤氏は続けて言う。「本当に日本人は歴史に対するしっかりとした責任というものを持たない民族なんですね。軍部だけではない。みんなが燃やしちゃったんですから」。

私、村井は主張する。こういう暗い過去の終戦（敗戦）までの時代があったからこそ敗戦後の日本は、国家公務員の公正、正義を法律にしたためのに、安倍政権では戦後70年の歴史の中で、ことごとく「黒塗り」や「削除」をして、国民を欺くという手段で逃げた。

これは敗戦後、日本は民主主義の何の反省もなく、今日に至っていることを証明している。

こんなことをやっていると、やがて次の歴史上で日本は必ず国家の転落、国家の没落につながる、ということを記しておく。

戦後生まれの安倍坊ちゃんには、この「黒塗り」や「削除」の重要な意味がわかっていない。

中曽根康弘首相は晩年、次のように述べている。「政治家は常に歴史法廷に立つ被告人である」――安倍には上記の活字を噛じて飲んでほしい。

週刊誌の活躍目立つ！

小沢一郎の主張する「PCR検査」無視が失敗のもと

週刊ポストは令和3年2月5日号で「菅・二階政治という疫病」のタイトルで世に出した。新聞、テレビでは、こうした直線的な批判の活字がなかなか出てこない。

続いて週刊ポストでは同日号の見出しに並んで「さらば菅総理、それが最善のコロナ対策だ」、「もうこの首相と幹事長には治療薬もワクチンも効かない」。

さらに同週刊誌のリードでは、次のように語っている。

「終わりの見えないコロナとの戦いで疲れきった国民に向かって菅義偉・首相は『対応が遅れたとは思わない』と自己弁護し、二階俊博・幹事長は『総理は果断に対応した』とかばった。

この期に及んでも現実を直視しない総理と幹事長に、もう〝特効薬〟は見当らない。

今年に入って、これほど日本政府に対してきおろして総括しているのに、日本の新聞ジャーナリズム、テレビジャーナリズムはおとなしすぎて日本政府は大喜びしているのではないか。

NHKテレビに至っては、相変わらず政権ベッタリの批評多く、困ったものだ。安倍首相が首相辞任の際、安倍をベタほめして解説した女性の岩田某などホントに私はまいってしまった。

男女平等の時代にきているのかもしれないが、これほど情緒的になって安倍さんキャーと言わせるような解説は女性には向かない。政治解説にはもっと冷静な人物がほしい。

私は国政で佐藤栄作、田中角栄、福田赳夫、中曽根康弘、竹下登ら多くの首相を生身で見てきたが、私の経験から言うと政治評論はキャリアを必要としており、NHKがいいとか若ければよい、というものでもない。

私はスタートが新聞記者出身だから今まで週刊誌はそれほど愛読したほうではない。しかし、最近は安倍政権末期やコロナ禍騒動で、一般紙の先を走る週刊誌を特別多く読むようになった。

そうしなければ、大げさかもしれないが、世の中の動きがわからなくなる。

そうした中でコロナ禍問題で週刊誌で光るのは「サンデー毎日」（令和2年12月20日号）のタイトル「小沢一郎が政権を痛撃！安倍氏は証人喚問か議員辞職しかない」（聞き手・倉重篤郎）が当時の週刊誌の中で一番光る。

本文で小沢氏は言う。

「大事なのはPCR検査をもっと本格的に増やすことだ。僕は初めから日本国民1億2千万人を無料で全員検査すべきだ。」――。

右の言葉に尽きる。この「サンデー毎日」が発売される前から小沢発言のあとを追ってこない。無視したのか？

総合的にみて小沢氏の「政治洞察力」は他を圧しており、他の政治家連中はヒヨコに見える。

早くから国民全員のPCR検査をしていれば、国民の何割コロナ禍に感染しているか、いないか早期に判明できたのに…。

そうした基礎数字をないがしろにしていたため、日本列島のコロナ禍感染者の分母（総数）わからず時間だけ過ぎて47都道府県の日本列島をつきぬけたらけにして大混乱のコロナ戦争にしてしまったというのが今の令和3年の現状である。

そして、日本の人口の1割が東京なのだから、いち早く東京コロナ禍退治をやらなければならないのに、小池都知事、安倍、途中からバトンタッチされた菅首相の気の抜けた「ボールの投げっこ」が、これほどのコロナ戦争に巻き込んだ責任は重い。

こういう大戦争（コロナ禍）になる可能性の高い時、今、国家の危機を救う指揮者が小沢氏しかいないというところに、日本の悲劇をみる。私が言うのは、ないものねだりだが…。

原稿が長くなるが、この「サンデー毎日」の小沢氏発言のさわりの一部を引用すると、「コロナの現状はひどい。どんどん遊びに行けというのと、やめてくれというのを両方やっている。

GOTOでは菅、二階両氏の観光、運輸の利権が見え隠れする。なのに自民党内から、きちんとそれを批判し、ただす議論が出てこない。急に重症者、死者が増え始めた。このままだと、もっとひどくなる。心配だ。菅氏が辞めるだけでは済まなくなる」（以下略）

ここに付け加える言葉に次の名言がある。

「その程度の政治家は、その程度の国民しか持てない。逆も真なりで、その程度の国民は、その程度の政治家しか持てない」。

外野席から、もう一点、発言したい。

今の日本は①政権党の「政治力」弱く②「野党」弱く、もう1つ③「マスコミ」が弱い。

なぜなのか。マスコミは時の政権に対して「忖度」しすぎて「コロナ禍」問題がいちばん好例だが、新聞よりもテレビの司会者、解説者、コメンテーターは一葉に直言を避けて忖度ばかり。結局、何が言いたいのか。

「時代がそうさせたのか」、「安倍の手法がすぐれていたのか」、いや、マスコミが去勢されたのではないか。

1年前からコロナ禍の大戦争が予測されているのに、1年たっても同じ所をグルグルまわっている山の手線同様、変化がない。

今の日本マスコミは、これと同様、男女ともテレビに出演するとコロナ禍の犯人を総括できない。格好だけつけて政党も各知事らも政党攻撃するわけでなく、ウヤムヤで1年がすぎた。国民という外野席から見ていると、まるでマンガで、見られたものじゃない。

美人キャスターあがりだと能力あると思われるだろうが、小池都知事みての通り、あんなピーマン女性（ガランポ）にどれだけ国民、都民は惑わされてきたことか。

コロナ禍は弾丸のない空気飛沫戦争

菅首相と小池都知事の後手後手の人災

昨年の年明け頃から世界中に「コロナ禍旋風」が吹き捲（まく）り、地球規模でみると今年2月9日現在、コロナ感染者1億600万人、コロナ死者39万人。

今年1月26日（朝日）でみると世界のコロナ感染者トップ3は①米国2512万人（死者41万人）②インド、1066万人（同15万人）③ブラジル884万人（同21万人）

日本国内だけに限ると、コロナ感染者40万人、コロナ死者6000人強（うち東京だけの死者1000人を越す）――となって日本人のコロナ死者は世界の中でも異常に少ない犠牲者で推移している。

昨年4月7日、日本は遅まきながら「コロナ緊急事態宣言」を出した。この日まで日本国内の感染者は5179人、死者109人。

この時、日本にもやがてコロナ禍旋風がやってくると、咄嗟（とっさ）に反応した私は、昨年4月末に「コロナ禍は未知の世界の日本第3次戦争」とサブタイトルの見出しをつけて全国の主たる県庁、自治体に論文を郵送した。

これは自分で言っては笑われるが、「ジャーナリスト・村井の凄味」である。

この世界の生涯のうれしくない特ダネだ。

1年前から日本で「コロナ禍は戦争である」と発言、主張した人物が当時1人もいない、と思われる。ごらんの通り、この日本列島は今、戦場である。

× × ×

私がなぜ「日本第3次戦争」と記したかというと、「歴史に学ぶ」とか「歴史は繰り返す」という平凡なカンが働いたからです。日本には江戸時代前後も流行（はやり）風はあった。

世界規模で流行風をつまんでみると、大正7年（1918）から大正9年（1921）にかけて猛威をふるったスペイン風（スペイン・インフルエンザ）で、世界人口の3～5%に当たる5000万人以上が死亡した。

このスペイン風は第1次世界大戦と重なり、戦争が終戦の要因ともなった。日本でも大正7年以降、当時の日本人の人口5500万人のうち、約半数が感染して1%近くが死亡（これは大正12年に発生した関東大震災の死者10万人の5倍以上の犠牲）

そして、これは流行風ではないが、日本全体を巻きこんだ有史以来最大の不幸――日本が侵略した第2次世界大戦で日本人約310万人（うち民間人30万人）が死亡した。

10年前、福島県の東京電力原発を中心とした東北津波地震で1万8000人余死んだ。今も行方不明2000人余で合計2万人を越えたが、今のコロナ禍はエンドレステープのように感染者、死者は増加中だ。

世界の2つの大戦を経て私はサブ見出しに「コロナ禍から1年もなるのに、コロナ禍戦争の恐怖を訴える社会になっていない」と他紙にも訴え、さらに昭和20年の敗戦以来、日本国民は極楽トンボで平和ボケだ、とパンチのきいた活字を並べた。

私がコロナ禍と戦争を同時に関係していることを自にしたのは、今年の令和3年2月号の月刊紙「文芸春秋」の表紙見出し特集「第2次コロナ戦争」という活字で初めて本格的に登場した。

（昨年、夏ごろには週刊誌で「コロナ戦争」の文字があったかもしれないが、私のように昨年、年明けからコロナを戦争と定義した活字は見当らない）

あらためて「戦争」とは――人間のすべての不幸と涙を背負う。その2月号の表紙には「これは天災か人災なのか」とサブタイトルを付けているが、私は人災とみている。

最近、この10年、大手の新聞、テレビよりも週刊誌のスクープに注目している。日本の新聞、マスコミ、テレビはユルフンでタラカンだからだ。自由な国だが、付度が障害となっている。

確かに冒頭に記したように①アメリカ②インド③ブラジル――に比べると、日本のコロナ禍死者は6000人を越えただけだから、日本の政界、知事連中も「世界の中で日本はたいしたことはない。安さだ」とタカをくくっていたこと間違いない。

それを証明するのは、私が昨年4月に発表した論文を読むと明らかでしょう。

首相と小池都知事コンビは、お互いに責任をなすりつけてキャッチボールして時間つぶしをしていた。

一方で政府と都・小池知事が当初から「政局」にからませていることに、私はハラを立てているのです。

菅と小池は2人の会談を秘密にして、国民（＝報道機関）に成り行きをきちんと説明しない「不透明」は許されない。この手法は安倍前首相、菅、小池に共通している。

おまけに政府と都庁は、国民に「三密」をことさら強調して、中小企業の居酒屋などをいじめている半面、昨年の暮や新年には自民党幹部は予想されたことだが、東京・銀座のクラブでの酒盛り、女盛り。国民、庶民の苦しんでいるコロナ禍はそっちのけ。

私の長い国会記者の経験から、自民党系の国会議員は口先だけのコロナ禍防止スピーチ。自分たち政治家は別格とみており、庶民のコロナ死亡は日常の頭の中にはない。今後も「三密」の政治家が高級クラブに限らず、あちこちで出没して週刊誌のエサになろう。

私は佐藤栄作首相以来、ロッキード事件、リクルート事件、佐川急便事件…その時代の大事件を扱ってきた記者だが、上記の事件はほとんど「死者」を増大させるような問題ではなく、「政局」にまつわる権力闘争だから、まだ許せる。

ところが、コロナ禍死亡は人命に関わり、人間の死は2度と再生することはない。

私が昨年4月に論文を書いた頃は、日本の政財界やマスコミは「経済かコロナ禍か」――と迷っている記事が多かった。私には迷いはなかった。

「経済」はそれによって沈むこともあるが、再生もある。死んでは全てが終わりである。それが私のわかりやすい哲学。小学生でもわかる。

× × ×

その昔、青島幸男・参院議員（後の都知事）は当時の首相に向かって「あなたは財界の〝男めかけ〟だ」とブッて物議をかもしたが、この伝統は今も消えない。

菅は自分を首相にしてくれた二階幹事長を神のようにあがめたてまつり、財界が強行に押す「GOTOトラベル」にぐらつき遅いゴーサイン。（これも失敗政策でコロナ患者急増）

経済ばかりにしがみつき、国民の命は2の次にされてきたという怒りは消えない。

同じく小池も国民の命をあとまわしにして、菅と綱引きし、「コロナ禍は政府がやるべき仕事で、都は政府に従えばよい」という逃げの手で他人事のようにみえる。小池にはスピード感がない。コロナ禍とは急ぐ命の問題だ。

都知事は昨年3～5月は紙芝居のような4文字、熟語を毎日、テレビにかざして横文字を並べて平然。小池の心はコロナ禍の命よりもオリンピックに重点を置いている姿がすけて見える。

この風景は小池の次の都知事選を意識した自己PRにすぎない。都民は、それを見破れないでいる。

9月～12月には日本医師会の中川俊男会長らが「コロナ禍の入院先もなくなってくる」と叫んでいるのに、首相も都も全て無視して今では燎原の火。

12月から今年に入って入院できずに「コロナ難民」となって自宅待機の死亡が続出している。

そして、テレビ、新聞を中心にマスコミは「今日、コロナ患者、何人発覚して、何人死んだ」と毎日、数字だけ並べるだけで、時の政府と都知事を責める言葉がないのは見事だ。

その中で菅と小池のドタバタにあきれた大阪府の吉村知事や北海道の鈴木知事の「早急の動き」は見事。途中から埼玉県大野知事の力量が光る。

国民が菅や小池にたまきれているのも、日本民族らしい人柄、気質が出ている。「和をもって貴しと成す」という聖徳太子の言葉は、この場合、通用しない。

話は飛ぶが最近、歴史家で有名な半藤一利氏が90才でとくなった。氏は「歴史と戦争」（幻冬社新書）の中で「第2次大戦は日本が侵略戦争をしてきたのに、いつの間にか日本は戦争被害者で、敗戦を自然災害のように見せてきた」と皮肉ったが私も同感だ。

今のコロナ禍の日本急増は菅や小池が悪いのでなく、自然災害のようなものという空気が漂って、国民の反発は弱い。敗戦直後の「1億総ざんげ」（大宅壮一の造語）に似ている。

政府とマスコミの目に見えないコロナ禍操作に私はあきれているのだ。こんな世の中になるとはトホホ…である。

私もマスコミ出身だが、今のマスコミ陣の「忖度」はひどすぎる。真のマスコミジャーナリズムは格闘技でなければならない。

毎日、死んでいくコロナ禍の無策、無戦略をストップさせる「首相倒閣」運動、「都知事打倒」運動に、なぜ一言も発しないのか、不思議だ。ここまで日本列島を苦しめた首相、都知事を引きずり下ろすべきである。

若い学生はどうした。なぜ行動しないのか。学生や若者は新宿、渋谷、池袋、新橋、神田などで酒を飲んでいる場合ではないだろう！

昭和18年10月の戦争のための「学徒動員」に比べれば、今の「コロナ禍戦争」は序の口の序だが、令和のコロナ禍は日本の日常戦争になっている。

失業者1000万人、倒産1000社以上、女性の失業、親子心中、小中高の自殺者急増、医師や看護師不足による過労…。

コロナ禍のため親族、親子さえも会えない家族の孤独死。遺骨さえ拾うことを許されない悲劇。まさしくコロナ戦争は人間を無視した戦争なのである。

令和3年1月、TBSテレビの土曜夕方番組でコロナ禍「報道特集」の中で有名なジャーナリストは「昨年夏から秋にかけて政府と自治体はコロナ禍の討論の時間が十分あったのに、何をしていたのか。今頃になってコロナ禍難民に入れる病院がないとは国の政策はムチャクチャだ」（元NHK・木村太郎氏）

外国からワクチンを入荷しようというが、入荷できなかったらどうするのか。（これまで日本は治験するのに10年かかるという医師の話もあるが、外国の治験だけで急に日本にもワクチンを入れるという「前のめり」は安全なのか。素人の私でもハラハラする。今後、ワクチンは更なる難題として日本人の前に立ちはだかるだろう。）

× × ×

年が明けて「緊急事態宣言」をいつ解除するか、政府はなやんでいる。1月7日説は飛んで2月7日説、そして3月7日説、やがて4月…6月説まで出てきた。こんなデタラメ政府につき合ってられないので、私はこの緊急事態宣言には、あえてほとんど触れないできた。

首相や都知事がもっと早くからコロナ禍対策をやっていたなら、これほどひどい地獄の日本にならなかったと思う。

今の日本列島風景は敗戦時の空気と変わらない。国民は路頭に迷っている。今だって66%がコロナ菌の出所わからず、コロナ禍のエンドが見えない。

続いて「変異ウイルス」も世界に登場しているから、このコロナ戦争は、これから何年続くか不明。

繰り返しになるが、私は昨年4月のコロナ禍は第3次戦争」として、メインタイトルは「天皇が超法規で国民に協力を訴えるべし」と宮内庁にも投函した。

国民から信用されていない首相（支持率38%、不支持47%＝毎日）と小池は「朝令暮改」で国民の反応は良くない。

私は憲法を逸脱しても「天皇が自ら国民にコロナ防止に協力して国民団結せよ」と発言すれば、これほど国民を苦しめるメチャクチャな日本列島にならなかったと思う。

最近、タイでも国王が自国にいる時が少ないなら、王室はいらない――とまで発言する政治団体まで現われて、王室体制反対運動が起きている。

日本だって永久に皇室が生き残るとは限らない。国民の命を守らない、日本民族を守らないような皇室は国民から消されていく運命だってありうる。

私は右翼ではないが、私のように発言する者はいない。後世の日本が心配だから直言しているのです。

もし、あのコロナ禍が早くから防止できていれば、志村けん（喜劇役者）、岡江久美子（女優）、岡本行夫（元外交官）のような有名人もとくならなかったのに…残念、無念だったと思うのは私だけではないだろう。

令和3年2月9日　村井実

× × ×

追伸・検証

私が昨年4月「コロナ禍は戦争」と断定した原稿は10ヵ月たってようやく、まともな記事が載った。

令和3年に入ってから朝日朝刊の1面「緊急事態宣言後ろ向きだった政府」（2・14）、同じく朝日は2面で「小池氏の決断遅れ指摘も」（2・14）――という見出しで検証されてきた。

朝日のエンジン発射は遅かった。なぜ、もっと早く昨年春から、政府と都庁に赤信号を送らなかったのか。命を失ったコロナ死者たちは、日本の政治、行政の貧困を嘆の下でうらんでいるだろう。

一方、世界銀行チーフエコノミストのカーメン・ラインハートさん（○1955年生まれ、ハーバード大教授）の記事が朝日朝刊（本年2・5）に「世界経済破綻防ぐには」のタイトルで、次のように中見出しをつけている。

「コロナ禍は『戦争』、金融危機恐れつつ今回は財政出動を」――と。戦争と名がつけば国家の総力戦である。

右のことを政治家も財界人もジャーナリストも深刻に理解しないで、ズルズルと「令和戦争」に突入してしまった。

コロナ禍は政治家の不手際、タイミングの遅れで「覆水盆に返らず」。東京五輪の先は五里霧中。日本はどんでもない戦争に巻きこまれているのに、国民はその重大性に気づいていない。

政治家どもを棚上げにして、敗戦時の「1億総ざんげ」ムードにそっくりさんだ!!

令和3年（2021）2月15日　村井　実

JAPAN TODAY

2021年　MONTHLY　4,5,6月号

ゆうちょ銀行 村井 実　記号 19080　番号 16651271
三菱UFJ銀行、札幌支店（普）村井 実　店番 637　口座番号 3844118

尖閣諸島にロボットのガンダムを！

廃炉事業に特化した国際災害救助隊基地

尖閣諸島は日中で何かと政治問題化して、今日まで複雑化してきた。そこで日本は尖閣でガンダムのロボット（高さ約18メートル～20メートル、手足指も動く＝最近、横浜で高さ18メートルの歩くガンダム完成）を常駐救助の隊員とし、将来は日本のアニメ・ロボットを製作。その国に見合ったロボット（ドラえもん、鉄人28号、エヴァンゲリオンなど）を配置し、中国との関係でも平和とアジアの同盟国を巻き込むユーモアある外交力を発揮し、国際観光にも力を入れていく。

この民間組織、国際災害救助隊（アース・ヘルパー財団）基地の本部は廃炉事業に特化する。今の廃炉は大へん良い実験モデルであり、これを生かす。

これから廃炉は全世界で次々と出てくる。炉の寿命は50年～60年。世界に何百基も存在している。下手な廃炉業者では世界が今のパンデミック以上のこととなる。こうした観点から日本は廃炉に貢献できる。

また、日本の原発廃炉には現在、4000人が従事している。さらに日本のロボット大会では5回目ではあるが、福島県の高専が優勝。福島の若者は地元に根付いて活躍している。（国から福島原発処理に多額の予算が出ているので、その一部の利用でもよし）

今、日本の大学では、原子力に対する学生たちの期待と夢は3分の1に減っている。

国が年間、5000億円ぐらいの予算を付けて学生、若者を育てていけば、放射能に関わるロボット産業、さらに将来的には宇宙産業開発に対しても、放射線（能）対策が重要です。

当面、世界でも日本でも廃炉が重要問題です。地球温暖化の影響大。そこで地球を大たんに征伐するには、わかりやすく言うと廃炉を地球の火口（ドグマ）の自然界に戻して深く埋めてしまう作戦です。

人間の知恵でロボットを利用して勝ては、かつてのチェルノブイル（ソ連）のように原発が爆発して放射能が散って、周辺の自然界、人間が住めなくなるということも解決できるはず。それをやれるのは日本人です！

誤魔化しが利かないコロナ死者数

この国のかたち自体が崩壊する

検証・文芸春秋（令和3年2月号）

菅「敗戦処理内閣」の自爆＝片山杜秀＝慶大教授、政治学者は次のように語っている。

私たちは菅政権の〝迷走ぶり〟を毎日繰り返し見せられているわけですが、これからますます何が悪い方向に向かう歴史的な局面に立ち会っているのではないか、という嫌な予感がしています。（中略）

大げさなようですが、ひょっとして「この国のかたち」（日本の統治機構）それ自体が崩壊する過程ではないか。

こう思ってしまうのは、まず「安倍政権から菅政権への引き継ぎの仕方に、そうせざるを得なかった真の原因を糊塗するような〝不誠実〟さを感じるからです」

安倍首相の辞任は、表向きは「健康上の理由」とされています。しかし、安倍政権末期の一連の経緯を見ていると、コロナ危機を前にして、それまでのやり方が手詰まりになった。いわば「政権を放り出した」と思えてならない。

ここに言う安倍政権の「それまでのやり方」とは一言でいえば〝平時の非常時化〟です。つまり〝平時〟において〝非常時〟を煽る。ありもしない〝危機〟を演じて、その危機から国民を守っているように見せかける。

現在を実際よりも深刻に見せて、未来に希望を先延ばしする。これが安倍政権の得意技でこれによって政権浮揚を図ってきたのです。

それほどの危機でないような時にJアラート（ミサイル発射などに対する全国民瞬時警報システム）を鳴らして〝危機〟を煽ってみたり、東京五輪や大阪万博を誘致して、未来に何か良いことがあるかのように見せる。それは一種の幻影にすぎません。しかし、そう疑われても、また次の幻影を見せればいい。

安倍政権は、こういう演出を一生懸命にやって延命してきました。ところが、コロナ危機で安倍政権は〝本物の非常時〟に直面した。（中略）

× × ×

つまり、コロナという「いま目の前にある本物の危機」に対処しなければならなくなった。コロナという危機の実態は、具体的な数値となって表れます。

検査数に限界があると言っても、「感染者数」の日々の推移はすぐに数値化されます。とくに「死者数」などは誤魔化しが利かない。

こうなると、目の前にある本物の危機を放置して、何か別の幻影で国民の目をそらすことなどできなくなります。

こうした〝本物の危機〟に直面することで迷走し始めました。（以下略）

× × ×

慶大の片山教授論文は、私はすでにJ・T（ジャパン・ツディ）で①J・アラートの脅し②政権の投げ出し③コロナ禍の感染と死者のごまかし――を指摘してきたので、片山論文によって私の意見は間違っていないことを検証、証明した。

村井リポート追伸

令和3年1月、アメリカの米大統領選で敗れたトランプ大統領は、デモ隊とワシントンの国会議事堂を包囲して6人が死亡した。

アメリカはこれまで世界の中の民主国家代表のモデルとされてきたのに、私はア然とした。

これは地球の民主主義の崩壊の途にあると感じた。これによって中国はアメリカに対し恐れるものなし――これから米中の緊迫の時代に入る。

「平和」は最も大切だが「国防」もまた大切であり、車の両輪である。日本政府自民は日中緊迫をひと事のように語り、野党は黙して語らず、日本は平和しかないものと思い込んでいる。この日本の〝ぐうたら政治〟はどこへ流れていくのか。

アメリカだけに頼る政治は危険である――と主張しているのは古代ギリシャ国家の存亡に詳しい塩野七生（作家、在イタリア）氏である。これから「外交」で日本の真価が問われる。

（R3・3・31、村井　実）

尾野玲子

「火曜／歌謡クラブ」

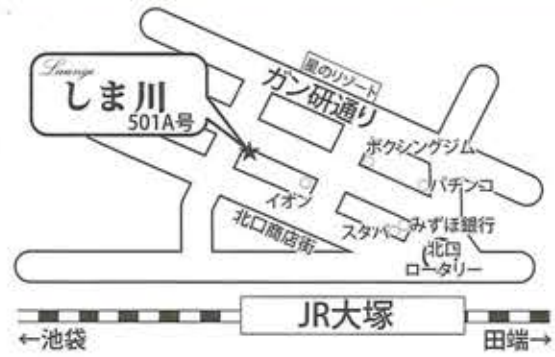
ご予約・お問合せ　尾野玲子　090-1858-2868

会　　場：ラウンジ「しま川」
TEL 03-5944-5090
豊島区北大塚2丁目12-7 北大塚12
共同ビル501A号

O P E N：毎週火曜日 13:00～16:00

定　　員：8名（事前予約お願いします）
密を避けるため人数制限・アクリル板設置をしています。

入 場 料：お一人様4,000円（カラオケ・飲み物・おつまみ 込み）



村井　実・発行のジャパン・ツディはフリーペーパーですので昭和62年創刊以来、村井の私財で、これまで2,000万円以上投入してきました。しかし、近年のコロナ戦争が影響。私の私財も貧者の1灯でがんばっています。私のジャーナリスト精神に賛同される方、1カ月・1,000円から1万円の中で献金していただければ幸いです（実）